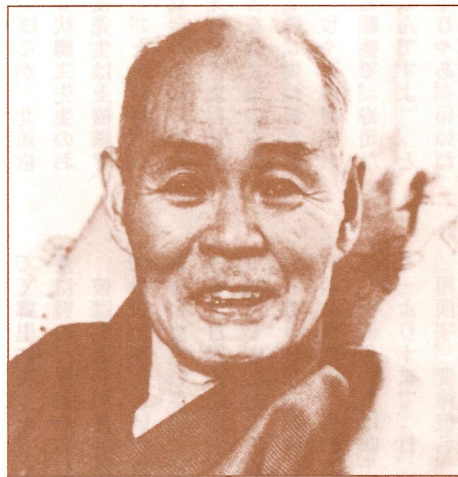




特集

上林 暁

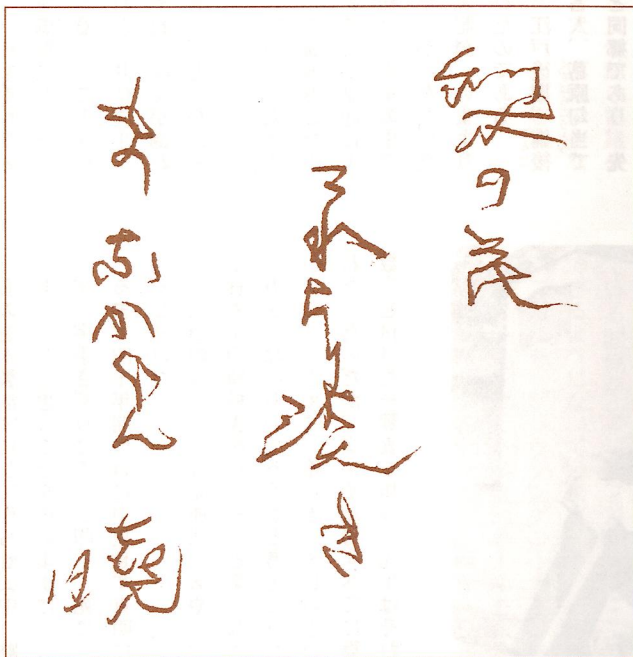
意志と善意の人——自らの惨苦を見すえた不撓の作家——



上林 暁

いか、というおそれがあつたからだ。昭和三十七年十一月、上林先生が、二度目の脳出血で病床の身となられてから十八年間、難業苦行の執筆活動をつづけてこられたことは、令妹徳広睦子さんの名著『兄の左手』刊行によって、広く知られるようになった。私の小稿執筆は、その名著出版四年前のことだったのである。

ただ断っておかなければならないのは、ここでいう難業苦行が、原稿の文字の表記についてであつて、作品の生みの苦しみではないということである。「生みの苦しみ」は、上林先生が文学に志されてから絶筆に至るまで、変ることがなかったのだから。



梨の花

これより淡き

ものなからん 暁

「梨の花」の色紙

— 苦難の文字の

自然破形美—

小林 亥一

「悲願の原稿」という題名で、『上林全集十三』の月報に、小稿を書かせていただいたことがある。

これを書くとき、ためらいを覚えて急には取り掛かれなかった。それは、活字になった拙稿を読まれた上林先生が、不快感を抱かれはしないか、というおそれがあつたからだ。昭和三十七年十一月、上林先生が、二度目の脳出血で病床の身となられてから十八年間、難業苦行の執筆活動をつづけてこられたことは、令妹徳広睦子さんの名著『兄の左手』刊行によって、広く知られるようになった。私の小稿執筆は、その名著出版四年前のことだったのである。

想像を絶する難業苦行がいかなるものであつたかは、『兄の左手』に詳しいし、本稿でも後述の小稿引用の部分でも触れ、「梨の花」の色紙の元になった、先生のお葉書についても具体的に述べるごとくである。

上林先生が、そのようにして発表されてきた原稿は、晩年まで破り棄ててこられたので、私が「悲願の原稿」などと題して、難業苦行の模様を述べたりすることを、うとましくお感じになるのではなからうか、そういう思いが去来して止まなかった。また、「わが仏ありがたや」からでもなく、大仰な表現でもないと確信してはいながらも、「悲願の原稿」が、古今東西類を見ないものであり、文学史上特異な存在として光を放つ、などと書くことは、はばかることがあつた。上林先生が面映ゆい思いをなさるのではなからうか、という気もしていたからだ。

あれやこれや思いめぐらした末に、私なりに結論に達した。「自分の気持ちに一番素直に書くしかない」と。

月報の「悲願の原稿」は、句読点の誤植はあつたが、バランスよく組まれていた。上林先生のお叱りも受けなかつたし、睦子さんもよろこんで下さった。それには、小稿の内容に、亡友関口銀杏子が深く関わっていたためかもしれない。

銀杏子関口良雄さんは、上林文学に深く傾倒し、日本近代文学書目の嚆矢ともいふべき『上林暁文学書目』を、自力で刊行したほどだったが、上林先生、睦子さんも、こよなく彼を信愛なさっていた。銀杏子は優れた文学的才能を有し、巧まない楽しい話ぶりには、だれしも魅せられてしまった。病床の先生が、いかに彼の訪問をよろこばれたことか。温く豊かな人間性と爽朗な人柄は、文人に限らず多くの人々に親しまれたのである。彼が「冥王星の近くの星になった」のは、上林先生御逝去の三年前、享年五十九であった。

それより数年前にさかのぼるが、北新宿の酒亭「くろがね」で、井伏鱒二先生のお話をうかがった折、その夜先生は上機嫌で、つぶやくように「愉快だ」、といわれ、「このごろ上林君はどんな具合かね」、とお尋ねになった。私は、「先日参りましたが、お変わりないようです。読書をなさるのも大変なんです、プルーストの『失われた時を求めて』を読んでいらつしやるんです。びっくりしました。食欲も旺盛で、寿司など一人前さつと召し上がるんですよ」、とお答えした。先生は、「そりゃあ、いいね。大したもんだ。プルーストは、上林君が好きそうだね」、といわれて、杯を重ねておいでの庄野潤三さんの方を御覧になった。庄野さんは、同感だという意味のことを述べて、上林文学を讀えられた。井伏先生は、「病後の作品が特にいいやね。ぼくが倒れたら、すぐ駄目になるなあ」、といいかにも楽しそうに笑われた。

その夜遅くなつて帰宅してから、太宰治の「盲人独笑」を取り出して読み返したのは、「くろがね」で太宰のことが話題に上つたからであつたが、帰りの電車の中でふと妙案と思われることが浮かんだためだつた。上林先生の原稿の表記が、いまよりも楽になされそうに思われたのである。

「盲人独笑」の盲人は、江戸後期、備後国深安郡に生まれた琴の名人、葛原勾当である。勾当は、井伏先生と同郷であり、先生のお話では、お姉様の琴の師は、勾当の弟子だつたそう。勾当は三歳で失明し、幼時から琴に親しみ、少年になつて京都の松野検校の門に入った。天才ぶりを発揮して十五歳で勾当の位を授けられた。しかし、彼は当時の音楽の世界をきらい、名利を捨



てて郷里に帰つた。そして、琴の教授、普及に努め、作曲をもしたという。

彼は生来きわめて器用で、折紙細工は特にうまかつたといわれ、和蘭時計の修理などもしたというが、奇想天外ともいふべき独特な日記の記述を、四十年間にわたつてつづけてきたのである。驚嘆という外はない。この日記の記述法は、「盲人独笑」に次のように述べられている。

平仮名いろは四十八文字、ほかに数字一より十まで、日、月、同、御、候の常用漢字、変体仮名、濁点、句読点など三十個ばかり、合わせても百字にも足りぬものを木製活字にして作らせ、(中略)ありしこと思うことをそのままに、一字一字手さぐりにて押し印し、死に至るまで四十年間ついに中止せず克明にしるし続けた。

この勾当のユニークな記述法にあやかつて、上林先生の原稿表記が、もつと楽になされる方法がないものだろうかと思つてみた。いまにして思えば、差し出がましい思い入れだつたのだが。文字や記号すべてに算用数字を付けた一覧表を作り、先生はそれを

御覧になつて、数字だけを原稿用紙にお書きなつてはどうか、文字よりも数字の方がずっと楽なように思われたのである。しかし、やはり机上の論に過ぎなかつた。落ちて書いて考えてみると、膨大な数の数字で埋め尽くされた原稿が浮かんできて、うんざりしてしまつた。

原稿を数字で埋め尽くすなど、愚の骨頂だが、この表記法を部分的に活用すれば、きつと有効だといふ確信があつた。部分的というのは、書かれた原稿の中できわめて解説困難な文字のことである。その解説がいかに大変なものであるか、月報の拙稿から転記してみよう。

先生の原稿を完成するためには、解説不明な部分を口述していただくなければならぬが、それを文字に直すことこそ至難の業、彼女でさえも身の細る思いをされるのである。難解な文字以上に分りにくい先生の言葉を、正確に聴き取り、適切な文字で表記しなければならぬからだ。一編の中には、はっきりしない言葉が幾つも出てくる。一、二度聞き返して解決するものもあるが、何度いつてもらつても理解できない難物も含まれている。繰り返しが度重なるにつれ、先生は緊張なさり、枕から頭を浮かせて声を励まし、叫ぶようにおつしやるのだ。そのような状態が長びくと、お二人とも疲労困憊し、黙つてしまわれるという。たつた一語を表記するために、しばしばそのような苦しみを経なければならぬ。

※令妹睦子さん

先生の「叫ぶようにおつしやる語」は、一覧表の文字を指し示されるか、数字で書いて下されば、疲労困憊なさらずに済むと

考えたのであつた。

「くろがね」でのお話もお知らせしたかつたし、「部分的な文字表記法」も申し述べたかつたので、数日後、天沼へ伺つた。私の話の切り出し方がまずかつたからであろう。一覧表表記法についてお話し出すと、先生はお顔を横に振られたし、睦子さんは、「そういうこともいろいろ考えてみたけど、とても無理ね」、といわれた。私は黙つてしまつた。

手が不自由で書くことができなかったり、失明した場合に、口述筆記という方法が用いられる。滝沢馬琴の晩年がそうだつたことは、よく知られているが、その方法で作品を発表した作家も稀ではない。上林先生も病床の身となつてからある期間、睦子さんの筆録によつてそうなさつていた。あの異色の名作「白い屋形船」も口述だつたように。先生の左手も右手同様に、まったく機能しなかつたとしたら、余儀なく口述筆記で作品を発表されていたに違いない。しかし、それを長年つづけられることは、恐らく困難だつたであろう。話される言葉もきわめて御不自由な先生にとつては、

以下次号に続く

筆者、小林亥一氏の紹介

色紙「梨の花 これより淡き ものなからん」の作成者。

一九二三年、新潟県生まれ。文筆業。

著書『青ヶ島島史』緑地社、『伊豆諸島、小笠原諸島民俗誌』(共著)ぎょうせい。

『文久三年御蔵島英語単語帳』小学館。他、上林暁とは昭和四十四(一九六九)年から親しくされていた。

すばらしい伊野町立図書館

―県内の図書館・文学館の視察をして―

大方町立図書館協議会委員長 宮川 昭 男

八月二十七日、図書館・文学館の協議会委員と関係職員と十名ほどで、県内の主な図書館・文学館を視察させていただきまし

た。
伊野町立図書館・県立文学館・県立図書館・春野町立図書館を巡り、それぞれの所で学ぶことが多かったのですが、一番印象に残ったのは伊野町立図書館でした。

玄関から入ると、まず、明るく、ゆつたりとしているのにおどろきました。正面の廊下が横五メートル、縦三十メートル位でしょうか、広くて、二階まで吹き抜けになっているのです。心も開放されるような気持ちになりました。

入るとすぐ左に、大きなガラス窓のある明るくて広いこどもコーナーがあり、続いて小中学生コーナーがあつて、児童図書・文学書の棚が続きます。その閲覧棚の左・窓側の明るい部分には机が五つ、椅子が二十脚置かれています。

玄関から入って右側は新聞・雑誌などが置かれたブラウジングコーナー、続いてAVコーナーがあつてビデオが六個設置され、個別に枠がされて、各人が気兼ねなく視聴できるようになっています。その次は対面朗読室になり、続いて、事務室・受付になっています。受付カウンターは、長い机が二つあり、貸し出しや返却する者が多い時も対応しやすいようになっています。また、受付から一階はもとより、吹き抜けになつ

ている関係から二階にも気を配ることができるようになっています。

二階にも、ブラウジングコーナーがあり、郷土資料コーナーや多目的ホールもあり、利用者が利用しやすいようにいろいろ工夫されています。机が九つ、椅子が三十八脚、四か所に配置よく置かれています。

こどもコーナーや小中学生コーナーなどを含めると、椅子は全部で七十四脚になり、それぞれの場所ですべて読書できるようになっています。一階、二階とも、開架式の棚と棚の間も百五十センチメートルと広く、ゆつたりとした感じです。

三階は、開架式書庫や収蔵庫になっており、貴重な資料が大切に保管されています。

蔵書収容能力十万冊、延床面積一六一八七七平方メートル、平成十年十二月の開館以来、まだ間がないのに、幼児からお年寄りまで、たくさん利用者があつてい

ます。
人口二万五千人ほどの町に、このように広くゆつたりとして、明るく、利用者への配慮のゆきとどいた施設が、どうしてできたのか、不思議に思つたずねると、公民館の図書室に三十年ほど勤めていたという職員が即座に答えてくれました。

「私たちが利用者のことを一生懸命考えて設計し、それがほとんど受け入れられています。」

行政が職員を全面的に信頼し、経験豊かな職員たちが体験に基づいて利用者が利用しやすいようにせいっぱい考えた結果生まれた施設だったのです。

私は、十月にも再訪し、その時午後六時の開館近くまでいたのですが、外は薄暗くなつても、館内はあかあかとして、まるで昼のようでした。数えてみると、一階・二階合わせて百個以上の照明が設置されていました。これにも、おどろきました。

その時お聞きしたのですが、こどもコーナーでは朝早くから親が幼児に絵本を読み聞かせている姿がよく見られると、館長さんがにこにこ話してくれました。小・中学校との連携もよくできており、調べ学習などに活用してくれているということでした。展示スペースに、大型の紅葉した尾瀬の美しい写真が貼つてあつたので、だれが写したのですかと聞くと、お客さんが持つて来てくれた、ということでした。地域のみなさんに支えられているのだなあと、胸のあつくなる思いがしました。

とにかく、計画当初から行政にも町民にも信頼され、支えられながら育っている文化施設の一典型を見る思いがしました。職員の顔も、にこやかで、生き生きしているように感じられました。

私たちの町の図書館も、子どもたちをはじめ利用者は多く、職員は一生懸命になつてくれているのですが、課題はたくさんあるなあとというのが実感です。今回視察させていただいた図書館・文学館から学べるところは、せいっぱい学んで、町民の文化施設としての実をあげていくよう努めていきたいものです。

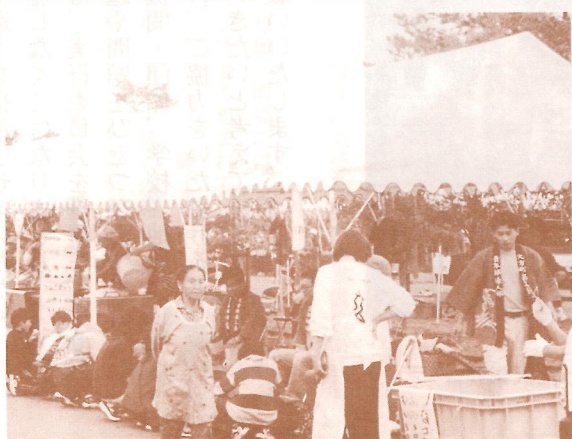
〈第37回〉

大方の秋まつり

盛大に開催

平成十一年十一月十三日(土)・十四日(日)ふるさと総合センターで開催

“心のふるさとをとりもどそう”を開催テーマに室内の展示部門、おまつり広場の出店、また、特設舞台では郷土芸能をはじめ数々の舞台芸能がくりひろげられた。



コミュニケーション助成事業でテントを購入
コミュニケーション助成事業とは、宝くじ受託事業収入を財源とし、地域社会の健全な育成を図るため、いろいろな事業をしています。

大方町でも、この事業を利用しパイプ TENT を購入しました。地域の行事には貸出しいたしますので活用下さい。

平成
14年

よさこい高知国体開催



国民体育大会とは

国民体育大会とは、国民の健康づくりやスポーツ文化の発展を目的に各都道府県持ち回りで毎年開かれている、我が国最大のスポーツの祭典です。冬季・夏季・秋季の順で行われ、都道府県対抗で得点を争います。

七月に「よさこい高知国体」が正式に決定され、夏季大会が平成十四年の九月二十一日から二十四日、秋季大会が十月二十六日から三十一日まで開催されます。大方町では、夏季大会にテニス競技（少年男子・女子）秋季大会には、剣道競技（全種別）が行われます。

また、芸術作品の展示などのスポーツ芸術も実施します。

●大方町で行われる競技●

開催競技	テニス競技 (少年男女)	剣道競技 (全種別)	スポーツ芸術 (漂流物展)
会 期	夏季大会 9月21日～24日	秋季大会 10月26日～31日	秋季大会 10月26日～31日
開催場所	土佐西南大規模公園 テニスコート	土佐西南大規模公園 体育館	大方あかつき館
参加人員 (選手・監督)	237名	587名	

町民の皆さんへ

国体を成功させるためには、行政、各機関・団体、住民が協力して取り組みをしなければ到底成し遂げられるものではありません。

とりわけ、高知県では輸送や宿泊の面が他県に比べ整っておらず、また、近年



平成7年に開催のふくしま国体
テニス競技広場となった天栄村

の財政の悪化に伴い簡素化が叫ばれているなか、実りある国体を成功させるには、より一層の地域の皆さんのご協力が重要となってきます。

ひとつ例をあげてみると、大方町においては大会関係者全員をまかなえるほどの宿泊施設がないため、町民の皆さんのご家庭に選手を宿泊させていただき、民泊を実施しなくてはなりません。

今後は、実行委員会を設置し、そういった課題や問題をひとつひとつ検討しながら各機関・団体、学校、地域にひろく呼びかけ、ご協力をいただけるよう取り組んでいきたいと考えていますので、よろしくお願いいたします。

大方あかつき館

〒789-1931 高知県幡多郡大方町入野6931-3 TEL:0880-43-2110 FAX:0880-43-0222